慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	肥後実学党と初期の慶應義塾(一) : 林正明と岡田攝蔵を中心として
Sub Title	
Author	坂井, 達朗(Sakai, Tatsuro)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	1984
Jtitle	近代日本研究 Vol.1, (1984.) ,p.1- 32
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	挿表
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19840000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

肥後実学党と初期の慶應義塾 (一)

——林正明と岡田攝蔵を中心として——

坂井達朗
(福澤研究センター所員)

(一)

慶應義塾「福澤研究センター」では、福澤在生中の、本来の意味での福澤門下生達が、全国各地からどの様に集まり、また学業を修めた後は、どの地方に赴いていかなる活躍をしたかを明らかにすることを目標にした共同研究を、昭和五四年以来すすめてきている。この研究は、ただ単に塾の歴史のかくれた一齣に光を当てることによって、忘れられた先輩の業績を探り起して正当に評価すると言うことをめざしているものではない。封建制度の末期にあって、最も先鋭に近代社会を希求した思想家の一人であった福澤の影響が、その門下生達によっていかに受容され、どの様に全国各地に伝えられ、結実したかを探ることによって、思想家であり同時に教育者であった福澤が、日本の近代化にどの様に関わったか、その役割と限界とを明らかにしようとするものである。

幕末から明治初年にかけて、福澤の出身地豊前中津藩が多くの門下生を彼の塾に送り、またその中から多くの人材が輩出したことはすでに人口に膾炙した事実であり、ここで改めて指摘するまでもない。また当時塾内に重

きをなした藩は単に中津のみにとどまらなかったことも、つとに指摘せられているところである。「慶應義塾では古く、義塾の『三藩』または『四藩』ということがいわれていたと伝えられる。主として維新前後から明治初年にかけ、塾内に勢力のあった代表的な数藩を称したもので、まず入学者の多かったこと、しかもそのなかから人材が輩出して、塾内における中心的存在となったものが少なくなかったことなどによる評判の藩というわけであろう。そしてこの『三藩』ないし『四藩』にあげられているのは、中津・和歌山・長岡と、のちに鹿児島がこれに加えられて、そう呼ばれたようである。」(1)

第一表のB欄は、塾が文久三（一八六三）年以来記録している「入社帳」(2)（他の学塾等における入門帳に相当する）によって、福澤の没した明治三四年までののべ入塾者数（途中一時退塾した後に再度入塾する者はこの時期にかなりの数にのぼる）の道府県別分布を示している。これによると、最も多数の塾生を出しているのは東京の一、九一五名であり、総人数の約一六パーセントに及び群をぬいている。新潟、静岡、鹿児島、千葉、神奈川がほぼ同数（四〇〇名台で全体の四パーセント弱）でこれにつぎ、以下大分、長野、兵庫と続いて、最も少ない沖縄の二七名まで、一県平均二五七名が入塾している。

塾の所在地東京や、近県である千葉・神奈川、また維新後多数の旧旗本が移住した静岡が多くの塾生を出しているのは、ある意味では当然ともいえるし、福澤の故郷大分が多いことも理解しやすい。しかしそうした簡単な地理的条件や人間的つながりのみからでは、鹿児島をはじめ山口、新潟などの遠隔地出身の者がかなり多く、また奈良・徳島・富山のように隣接県からは多数入塾しているにもかかわらず、門下生の少ない県のあることは説明できない。

このような現象を考えて行くための一つのファクターとして見落せないのが、当時の人口である。同表のD欄

は、明治前半期に変更の多かった府県の境界が、ほぼ今日の区画に落ちついた明治二一年末の道府県別男子人口を示している。この数値でB欄の塾生数を除し、一、〇〇〇倍した値F欄は、各県にどの程度の密度をもって福澤門下生が在ったかを示す指数であると理解することができよう。

この場合にあっても、東京、神奈川のような府県が高い数値を示していることにかわりはないが、目立って興味を引くのは北海道である。全体で二二七名の塾生は、絶対数としては四七道府県中第二〇位で、決して高順位ではないが、当時の男子人口に対する割合から言えばきわめて高く、東京についで第二位の比率である。同様のことは、やや低い程度において和歌山・佐賀・高知についても言うことができる。またこれとは逆に、絶対数としての門下生は多いが、人口に比較すると少ないのは、新潟・兵庫・愛知等の県であることがわかる。

門下生の全体数もさることながら、さらに興味深いのは、彼らが、今我々が問題にしている期間の内の、どの時点で入門しているか、いいかえれば、各県からの塾生の構成比率が時間の経過と共に、どの様に推移したか、と言うことである。すでに見た「義塾の『三藩』または『四藩』」といわれたと伝えられている現象は、どの時期に、どの程度まで妥当するのであろうか、という問題である。

第一図は、文久三年から明治三四年までを五年刻み（最終期間のみ四年）に八期間に分け、この時期に多くの塾生を出しているいくつかの府県について、そこからの入塾者が全体の中で占めていた割合の変化を図示したものである。

ここに明らかに読みとれることは、これらの府県の示すカーブには、大きく分類して三つのタイプがあるということである。例えば東京・神奈川に代表されるタイプは、第一段階では最も低く、以後は曲折を含みながらも漸時上昇して行き、最終的には全国平均をはるかに凌駕する数値に達する型を示している（タイプⅠ）。

第一表〈道府県別門下生数と対人口比〉

A	B	C	D	E	F
道府県名	塾生数	同左順位	明治21年末男子人口	B/D ×1,000	同左順位
北海道	227	19	129,722	1.75	2
青　森	135	32	278,481	0.48	21
岩　手	136	31	341,151	0.40	28
宮　城	127	34	374,590	0.34	32
秋　田	117	35	361,088	0.32	34
山　形	203	25	378,322	0.54	19
福　島	171	28	461,999	0.37	29
茨　城	242	15	506,909	0.48	22
栃　木	230	18	336,858	0.68	10
群　馬	225	20	334,840	0.67	11
埼　玉	320	9	525,519	0.61	14
千　葉	425	4	595,168	0.71	9
東　京	1,915	1	565,918	3.38	1
神奈川	412	5	445,647	0.92	4
新　潟	461	2	855,976	0.54	19
富　山	93	38	382,361	0.24	38
石　川	132	33	380,281	0.35	31
福　井	169	29	304,001	0.56	17
山　梨	141	30	222,641	0.63	13
長　野	334	7	563,763	0.59	15
岐　阜	207	23	472,160	0.44	24
静　岡	461	2	542,330	0.85	7
愛　知	300	12	724,610	0.41	27
三　重	254	14	461,186	0.55	18

A	B	C	D	E	F
道府県名	塾生数	同左順位	明治21年末男子人口	B/D ×1,000	同左順位
滋賀	112	37	333,576	0.34	32
京都	206	24	432,025	0.48	21
大阪	263	13	591,643	0.44	24
兵庫	333	8	770,110	0.43	25
奈良	46	42	249,864	0.18	39
和歌山	301	11	319,994	0.94	3
鳥取	63	41	202,373	0.31	35
島根	116	36	355,121	0.33	33
岡山	234	17	556,097	0.42	26
広島	206	24	667,545	0.31	35
山口	309	10	469,760	0.66	12
徳島	91	39	343,961	0.26	36
香川	86	40	339,063	0.25	37
愛媛	218	21	464,807	0.47	23
高知	237	16	296,681	0.80	8
福岡	309	10	614,509	0.50	20
佐賀	191	26	283,379	0.67	11
長崎	209	22	369,399	0.57	16
熊本	187	27	518,935	0.36	30
大分	350	6	396,590	0.88	6
宮崎	91	39	204,987	0.44	24
鹿児島	441	3	496,430	0.89	5
沖縄	27	43	186,075	0.15	40
合計	12,063		20,008,445	0.60	

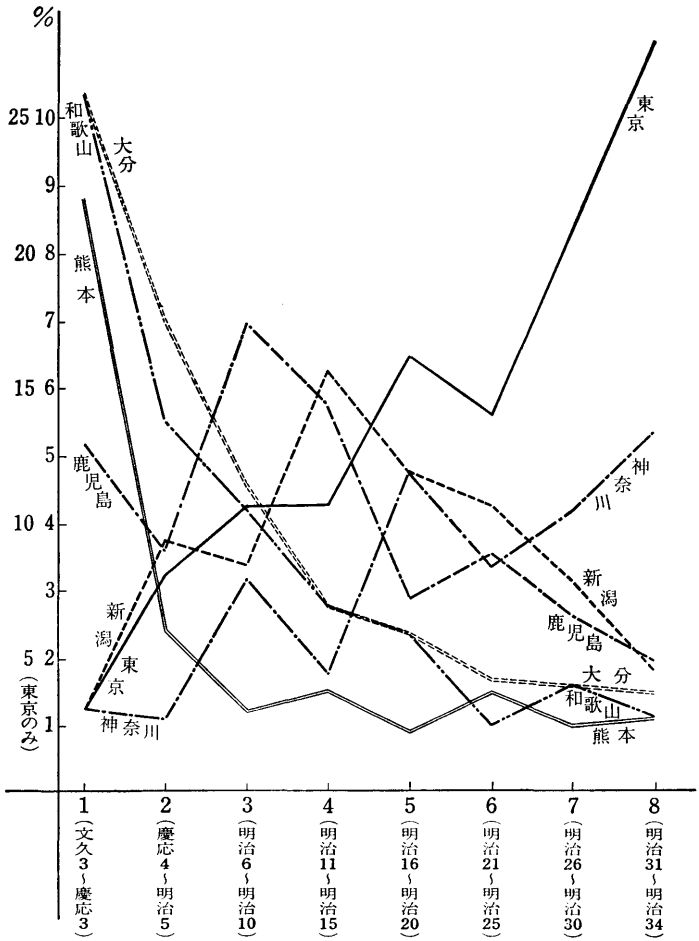
これに対して対照的なカーブを示すものは大分・和歌山である。ここでは第一段階での数値が最も高く、それぞれ全塾生の一〇パーセント前後にも達していたのであるが、以後は時と共に急速に下降し、第八段階では四七道府県の単純平均を下廻る二パーセント弱になる（タイプⅡ）。

第三のタイプは、カーブの頂点が、前の二つのタイプの中間、すなわち第三ないし第四段階にあり、その段階にあっては、いづれも全国の中でも高い比重を持ってはいるものの、その後急速に減少して、第八段階ではほぼ全国平均の数値を示すにとどまるものである。新潟・鹿児島等がこれに属する（タイプⅢ）。

府県別構成のこのような特徴的な変遷をみせる門下生群を生み出した原因は何であろうか。筆者はそれを、窮極的には、思想の送り手である福澤の人格や学問と、それを受けとめる人々のおかれていた思想状況との、相対的位置関係であると考えている。未曽有のスピードでめまぐるしい変転をとげ、近代社会への道を一気に走った時代状況の中で、福澤の思想にも曲折があり、またそれを受けとめる側の環境や立場にも大きな変転があったはずである。この二つの変化する条件は、それぞれの地域における福澤の思想の受容のされ方、ないしそれへの評価の変動として現象する。福澤の門に学ぶ人の数とその変化の地方的特徴とは、同一の時点をとってみれば、各地方における支配的な思想状況と福澤思想との位相関係を示し、その時間的推移は、それぞれの地方におけるその変動の函数であると考えることができよう。

以上のような問題意識から、筆者は本論において、熊本県[3]の事例をとりあげ、そこにおける門下生の在り方とその変化の原因とを考えてみたい。第一表に示した如く、ここにおける福澤門下生は、実数においてもまた人口に対する割合から言っても、全国平均を大きく下廻っている。それらの順位は二七位と三〇位であり、この時期に全般的に塾生の多かった九州地方にあっては、宮崎県と共に、例外的に福澤門下の少なかった地域であると言

第1図　府県別塾生数の推移
（全体に対する割合）



（註）本図に使用した年次別，道府県別入塾者数は丸山信氏の資料による。

うことができる。

しかるに、第一図に示した府県別の塾生数の全体に対する割合の変化をみると、第一段階の熊本は和歌山・大分とならんで非常に多数の塾生を送っていたことがわかる。[4] 文久三年から慶応三年までの五年間に入塾した者の総数は二五〇名、内熊本出身は二三名を数え、全体の約九パーセントに相当する。ところが第二段階になると、塾生数は三三名に増加するものの、その比率は急減して二・四パーセント強となり、以後は一パーセント前後を上下するにとどまり、昔日のおもかげは全くない。さきに述べた「タイプII」の典型的な一例と言うことができよう。[5]

この様な急激な変化をもたらした原因は何であろうか。第一及び第二段階に熊本県から入塾した者の総数は五三名であるが、その内四〇名は熊本藩細川家々臣であり、支藩の肥後新田藩士が一名、人吉相良藩士は一二名にすぎない。したがって決定的な重要性を持ったのは熊本藩であり、ここにおける支配的な思想傾向、ことに洋学や福澤の思想・学問に対する評価の変化の中に、この問題を解く鍵がかくされていると考えられる。

なお本論は、本誌編集委員会のおすすめにより、既発表の小論[6]を、その後得られた資料及び共同研究者諸氏との討論を通じてえた知見とによって、訂正加筆したものである。

(二)

熊本藩における洋学の導入は、後に「御匙医士」になった福間英安が長崎で蘭学を学んだのが最初であり、その後「文久の頃からは」「藩府も時勢に鑑み」て留学生を積極的に送り出すようになったと言われている。[7] この

藩の幕末における学問の在り方や留学生の状況を具体的に示す史料として、藩校の記録である「学校帳」と、藩外への藩士の留学の記録である「遊学一巻帳」（いずれも熊本大学附属図書館内「永青文庫」架蔵）とがある。

「学校帳」は、元来は、宝暦年間と伝えられる時習館創設以来のものが揃っていたものと思われるが、恐らくは廃藩の際に処分され、今日は慶応四年以降をカバーする最後の一冊のみが残ったものであろう。丁数一、〇〇〇にのぼる大部のものであり、時習館と再春館（藩営医学校）に関する書類を、その作成・回覧の都度に写し取ったものであり、文武医各科の教員の任免、入学願い（「出樹願」）及び許可、両校での「居寮」（成績優秀者の寄宿制度）の許可と辞退、ほぼ隔月に行なわれた表彰の記録、長崎・江戸（東京）を中心とした各地方への留学（「遊学」）願いとその認可等々である。

他方「遊学一巻帳」は慶応元年以降明治三年までの藩士の公費私費による各地への留学に関連した、願書・身上書・照会・推薦状・試験結果・決定内容等を記録したものである。冒頭には「慶応四年辰正月書抜」とあり、さらに「慶応元年以前者選挙方取扱ニ付扣無之事　但書抜ニ付巡覧札等者学校方帳アリ」と註されており、この一冊が慶応元年以降の藩士の留学についての記録を、各種の書類から書き抜いて集成したものであることがわかる。恐らくはこの時期に急増した藩士の留学に対して、その先例を徴する便宜のために編集されたものであろう。

したがってこの二点の資料は、いずれも藩政最末期の数年間という限定された期間をカバーするにとどまるのであるが、この時期の細川家の文教政策の具体像を知る上で貴重な記録であることは疑問の余地がない。我々はこの二点の資料を検討し合わせることにより、熊本藩が幕末から明治初年に送り出した留学生について、福澤の門へのそれに焦点を合せつつ、彼らの背景を探ることから始めることにする。

〈資料一〉

御右筆ニ而病死仕候
林齢之允養子
林　玄助

(異筆)惣御巡覧済

右者養父林齢之允儀、安政元年十二月諸役人假被召出、御右筆見習被仰付、安政五年十一月独礼被仰付、御右筆本役被仰付相勤居候処、去月十日病死仕候。

右齢之允勤之年功浅ク御座候付而者、諸式如何程ニ可被　仰付哉ニ御座候処、玄助儀幼年ゟ諸芸器用而、往々見込之筋も御座候ニ付、御内達仕候処、文久三年五月航海術執(修)行として江戸表被　差越候。然ルニ右芸術稽古仕候ニ付而者第一洋学無之候而者十分之事業出来兼候付

公儀外国方調役福澤諭吉殿江入門被　仰付、専英学執(修)行仕候。惣体福澤殿門下者公儀衆ヲ始、列藩ゟ大勢之入学ニ而、等級等茂厳重相立居候処、玄助儀下地漢学茂相応ニ出来居上、生得之器用ニ根気茂強、出精仕候付、速々学業第一等ニ相進、二等以下之諸生ニ者会読受持相授候内、当夏一先御国江被差下候。其後於御国茂右学文不怠(問)執(修)行仕居、当時英学執(修)行被　仰付置候人躰不少候得共、岡田摂蔵ニ続候而者玄助丈ケ学業相進候者者見受不申候。右之次第ニ而福澤殿ゟ格別見込之人躰ニ而、既ニ江戸御留守居中并牛嶋伍一殿江、玄助儀者是非再学被　仰付候様有之度懇切ニ申出有之候由。右次第ニ而往々逸稜(カ)御用ニ茂相立候人物ニ而、当時西洋学御開之御模様奉伺候折柄、玄助先祖林弥二九郎江者御鍛作茂被下置候家筋ニ付、旁出格之御詮儀ヲ以、相応ニ被召出、江戸江再遊被仰付候ハヽ、其身者勿論、一統益々相競洋学弥以相開可申奉存候。是迄洋学之人乏敷、水陸之軍製(制)砲術航海術等之研究十分ニ到兼候事ノ已ニ御座候間、前文之通被仰付候様有御座度、於私重ねて奉願候。此段宜敷被成御達可被下候。以上。

十月

池部啓太

本紙林玄助儀航海術稽古として江戸江被差越置候面々之内ニ而者　学術別而致習熟、往々御用ニ相立可申人物之由、委細者池部啓太書面之通御座候。尚同人願之通猶江戸江遊学として可申被差越哉。尤玄助儀壱人扶持之御救被下置、跡目被立下、遊学被仰付而も不苦段者於選挙方兼御僉儀相究居候由御座候。

学校方
三好執筆

航海術稽古被
仰付置候林玄助儀、猶江戸江遊学願之通被仰付候間此段可為被御達候。以上。

十二月廿三日　　学校方
御奉行

池部啓太殿

「資料一」は「遊学一巻帳」に残る林玄助（後に改名して正明）の再遊学願いに関する推薦及び照会とそれに対する許可である。年号の記載はないが前後から推して慶応二年である。文中に文久三年五月に航海術修行のために江戸に出たとあるが、慶應義塾の「入社帳」によれば、同年「初秋九日」に入門している。これはほぼ同時に入社した保理井大助と共に、熊本からの塾生としては第一号であり、門下生全体の中でも小林小太郎（伊予松山）、和田克太郎（豊前中津）、同慎二郎（同前）、小幡杏平（同前）に続いて、五番目に古い弟子ということになる。

後年の林は自由民権派のジャーナリストとして活躍し、主宰した雑誌「『近事評論』および『扶桑新誌』に福澤批判の記事を掲載」して「門弟林と師福澤との関係は親密なものではな」くなり、林が「交詢社常議員に選出された年の秋、両者の対立は決定的となった」と言われている。[8] しかし両者の出会いの当初にあっては、師弟の

間は非常にむつまじく、福澤は林の才能を高く評価し、その学業が中断されることを深く惜しんだ様子がよくうかがえる。彼への期待が大きかっただけに裏切られた時の怒りも一層大きなものがあって、「不埒者には夫れ相応の罰を以て懲らしめずしては不叶、彼が如きは畢生其罪を免れ難し」[9]という劇烈な言葉も生れたのであろう。

事実若い日の彼が塾生として非常に優秀であり、その評判が藩内に高かったことは、前掲の池部啓太の推薦状にも明らかであるが、彼の後に同じ熊本藩からの入塾者が多数続いたことによっても傍証されよう。第三表に示したように、維新までのわずか数年の間に、二〇名以上の藩士がきびすを接して福澤の門に入っている。

この時期の熊本藩は、藩士の留学期間を一応二ヵ年とし、希望があれば試験をした上でさらに二ヵ年間ずつの延長(「再遊」)を許していた。林の場合も、福澤の運動が効を奏したものか、その後二ヵ年間、慶応四年まで留学が延長された模様である。この年、熊本藩は全留学生に対して「引払い」を命じている。林も当然この時に他の留学生仲間と共に国許に帰るはずであったが、本田知次郎、村上辰次、浜武慎助を含めた四人だけは「其儘江戸江被残置候」とされている。[10] この内、村上辰次が「入社帳」の元治元年三月に記載のある村上辰次郎と同一人であり、また本田知次郎が本田友次郎であれば、彼らもまた福澤門下で学んでいたことになる。

林はこのように再三留学期間を延長されて、結局明治二年まで慶應義塾で学んでいたようである。この年の四月、彼は藩命により「西洋遊学」に長崎から出発する。[11] 文久三年、福澤の門に入って英学を学び始めてから約六年の後である。

第三表〈廃藩置県以前における熊本からの門下生一覧〉

	氏名	入社	出身		入社帳
一	林玄助	文久三年初秋九日	熊本	一	一一二
二	保理井大助	文久三年秋七月	〃	二	一一三
三	岡田攝蔵	文久三年三月六日	〃	三	一一五
四	横井平治太郎	元治元年春三月	〃	四	一一七
五	上野三郎輔	〃	〃	五	一一八
六	国友次郎	〃	〃	六	一一八
七	宮川又三	〃	〃	七	一一九
八	北川文之助	〃	〃	八	一一九
九	本田信太郎	〃	〃	九	一一九
一〇	本田友次郎	〃	〃	一〇	一一〇
一一	村上辰次郎	元治元年秋七月七日	〃	一一	一一五
一二	兼友少介	〃	〃	一二	一一五
一三	林十郎介	元治二年春二月四日	〃	一三	一一六
一四	岩尾作左衛門	慶応元年五月五日	〃	一四	一一六
一五	岩尾大八	〃	〃	一五	一一六
一六	岩男内蔵允	慶応元年秋八月二〇日	〃	一六	一一四
一七	山北貫之介	慶応元年九月三日	吉人	一七	一一四
一八	加藤慎三郎	〃	〃	一八	一一四
一九	来良益三	〃	〃	一九	一一四
二〇	西道菴	慶応二年九月三日	〃	二〇	一一〇
二一	松邨元児	慶応二年一二月二日	〃	二一	一一〇
二二	佐久間英二郎	慶応三年三月三五日	肥後新田	二二	一一五
二三	冨田英三	慶応三年六(七)月九日	熊本	二三	一一八
二四	志方長平	慶応四年七月一〇日	〃	二四	一一五
二五	湯地丈之進	〃	〃	二五	一一五
二六	吉津辰熊	〃	〃	二六	一一三
二七	鈴木甚蔵	〃	〃	二七	一一二

	氏名	入社	出身		入社帳
元	西文信	明治二年二月一七日	人吉	三四	一一九七
二	轟数馬	明治二年二月三日	熊本	三三	一一三〇
三	増田利平	明治二年三月二四日	〃	三二	一一三一
四	菊地万之助	明治二年四月朔日	人吉	三一	一一三三
三	東澄蔵	〃	〃	三〇	一一三三
三	日野義六郎	〃	〃	二九	一一三三
三	西大一郎	〃	〃	二八	一一三四
三	雨森芳太郎	〃	〃	二七	一一三三
三	山代文之助	明治二年四月九日	熊本	二六	一一三九
三	右田庄之助	明治二年四月一九日	〃	二五	一一三五
三	荒尾武源太	明治二年一二月五日	〃	二四	一一三六
四	白石譲之助	〃	〃	二三	一一三六
四	寺倉三伯	明治二年一二月七日	人吉	二二	一一三六
四	相良勝馬	明治三年正月六日	〃	二一	一一四
四	江藤哲雄	明治三年四月一四日	熊本	二〇	一一〇一
四	菊池民一郎	明治三年四月二六日	吉人	一九	一一〇二
四	栗崎道純	明治三年四月七日	熊人	一八	一一〇三
四	栗田屋甚太郎	明治三年五月二日	〃	一七	一一〇三
四	奥山敬蔵	明治三年八月二日	〃	一六	一一〇三
四	赤星鼎蔵	明治三年九月七日	〃	一五	一一〇三
四	寺井十次郎	明治三年壬一〇月九日	〃	一四	一一〇三
五	古荘幾太郎	明治三年一二月六日	〃	一三	一一〇三
五	中島岩彦	明治四年一〇月三日	〃	一二	一一〇三
五	高木怡荘	〃	〃	一一	一一〇三
五	萱野彦八	〃	〃	一〇	一一〇三

(三)

「資料一」の池部啓太の推薦状に名前の出てくる岡田攝蔵は、「入社帳」によれば文久三年十二月の入門であり、熊本藩士の福澤門下生としては、林玄助、保理井大助につづいて三人目の人物である。しかし池部の文面にも明らかなように、洋学の修行歴から言えば、この岡田は林よりも先進者であった。彼は安政六年二月にはすでに大坂で緒方洪庵の塾に入っており、その意味では福澤にとって門下生であると同時に、適塾の後輩にも当ったわけである。[12] 彼は緒方塾での四年間、当時の熊本藩の留学制度で言う「再遊」(二期目の留学)の期間中に、文久三年六月、師洪庵の死にあい、「三遊」からは江戸に移って先輩福澤の門に入ったものと思われる。

慶應義塾における一年余の勉強の後、慶応元年閏五月、岡田は「製鉄所ならびに軍制調査のため」[13]に、フランス・イギリスに渡った外国奉行柴田日向守剛中(真次郎)に随行する機会をえている。彼は出発に当って「先生の家で旅装万端を整へ」[14]られたと伝えられるほどに、師弟の間は親しかったと想像されている。[15]

柴田は、かつて福澤が文久元年ヨーロッパへの派遣使節の一行に「反訳方」として加わって渡欧した際、「組頭」として参加していた人物であったから、[16] それ以来当然両者の間には面識があったわけで、今回の洋行には師福澤の推輓により弟子岡田が加えられたといういきさつがあったのではなかろうか。「一時塾頭のやうなことをしてゐた」「古参塾生中の年長で上級の者」[17]であった岡田に、洋行の機会を持たせようとした福澤の意図が背後にあったと考えるのは牽強附会にすぎるであろうか。

岡田はこの外国旅行から慶応二年二月に帰国し、早速福澤の「西洋事情」の例にならって、[18]「航西小記」(一巻)

を執筆、「二月上旬」に脱稿したのち、熊本に帰ったと思われる。藩の留学生としての所定の二ヵ年の「三遊」の期限がきていたのである。

「資料二」は「遊学一巻帳」に残っている、彼の帰熊後の再留学に関する記録である。年号は無いが慶応二年と判断される。

〈資料二〉

口上之覚

岡田攝蔵

右者今度御国江罷下、尚為洋学修行再遊被仰付哉之御模様奉承知候。右攝蔵儀者洋学之先輩ニ御座候間、一已之修行ニ而御座候得者い津方江罷越候而茂十分出来可申奉存候得共、当表江者為洋学修行多分之生徒被差越在御座候得共、未格別之習熟之者茂無御座、無拠土地之先輩ニ随而伝習仕候得共、列藩より之諸生茂夥敷罷越居候得者、勿論存分ニ指南を受候儀者出来兼居候処、幸攝蔵儀帰国之上再遊可被　仰付哉ニ付、是非々々当表江可被差越、其身修行之傍、御国生之十分之教導方を茂可被　仰付被下候様奉願候。将又洋学之儀者親敷洋人江接候を第一与奉存候処、箱館横浜与違、当港者洋人応習勝手差支不申、殊ニ標準ヲ仕候教師フルヘッキ義者万端之学ニ達、質問等茂致出来、且又海(操)軍旅之新議等者、各国之兵(艦)鑑替〳〵二三晩宛港内江碇泊罷在候得者、自在ニ其道ヲ被得、医学分(析)料等之課目者各其館茂御座候得者、洋学ニ付而者実者先進後輩之無差別、当湊を以天下第一之要地与奉存候者、旁以速ニ出崎、生徒之教導を可仕様被　仰付被下候ハヽ於私共難有仕合奉存候。此段宜被成御達被下様奉願候。以上。

五月

片山安平
寺倉三伯

岡田攝蔵儀長崎再遊之儀、岩男助之丞列書之面ニ小川次郎助添書之通ニ付、右攝蔵儀此節長崎為遊学可被差越候。但攝蔵身分之儀者別途於選挙方取扱候儀ニ御座候事。

学校方

本庄手永大江村
善行寺支配
岡田攝蔵

学校方
御奉行中

右者遊学として於長崎表江被差越候条此段可被有御達候。以上。

六月廿七日

中村庄右衛門殿

但巡覧札等者学校方帳ニアリ

私儀和蘭人ハラタマ江附属、分析術研究仕度奉願候。其儀者於御国許御内意仕置候間宜敷被成御達可被下候。以上。

七月

岡田攝蔵

小川次郎助殿

遊学として長崎江差越置候岡田攝蔵儀、分離学入門いたし度、別紙之通願出申候間則相達申候。宜敷被成御達可被下候。以上。

七月廿三日

小川次郎助

御奉行衆中

本紙攝蔵儀当五月洋学修行として長崎江再遊被指免置候処、於同所分離研究仕度由ニ而書面之通御座候。右ニ付而者御口達之趣茂有之、此砌旁願之通差免候而者何程ニ御座候哉。

学校方

岡田攝蔵
御目見医師
高橋叶二男
高橋鼎蔵

右者分離術兼学被　仰付候条此段可有御達候。以上。

九月廿六日

学校方
御奉行中

「口上之覚」の筆者二人の内、片山安平については未詳であるが、寺倉三伯はその後、明治二年には慶應義塾に入社しており、(一三頁第三表参照) 二人はこの時期に長崎で学んでいた多くの熊本藩士の留学生達のリーダー格であったものと想像される。彼らは、安政六年以来の洋学の先達であり、あまつさえヨーロッパ旅行の経験まで持っている岡田が、福澤の許から一旦帰熊し、再度留学を希望していると聞きつけ、彼の留学先を長崎に命じてもらいたいと希望したのである。岡田が長崎にくれば、本人も勉強の便宜がえられ、また「御国生之十分之教導方を茂」併せて命ずれば、一石二鳥の効果があるというのがその理由である。

恐らくはこの建白が功を奏したものであろう、岡田の長崎留学は実現し、同年六月からは彼が熊本からの学生達に初歩の手ほどきをすることになった。[19] 同じ頃自分自身の勉強として「和蘭人ハラタマ」[20]について、分析（離）学を学ぶことを願い出て、高橋鼎蔵と共に許されている。当時の岡田はすでに言葉の習得の段階は終っており、進んで専門分野の知識を求めるだけの語学力を持っていたのであろう。

「資料三」はこの間の事情をさらに具体的に物語っている。これは横井平治太郎が慶応二年から二ヵ年を長崎ですごした後、同四年再留学を希望した際の願書である。

〈資料三〉

覚

私儀文久三年於江戸表遊学被仰付同所病院ニ而和蘭文典書読書仕、海軍所ニ於いて和蘭算術稽古仕居申候処、元治元年九月長防御征伐ニ付同苗牛右衛門儀同所為出張罷下候付、奉願一同帰国、小倉表江出張仕申候。

一慶応二年正月長崎表江遊学被仰付ニ付、同二月出崎仕、柴田大助并亜米利加人フルヘッキ〻伝習仕候英書左之通

一文典書　一部
一リートル　一部
一算術書　一部
一通訳書　一部
一岡田攝蔵会頭ニ而会読左之通
一文典書　一部
一欧遊巴地理会誌　一部
一程課書
但究理之部会読未卒業不仕候

右之通御座候処満期ニ付当二月帰国仕候。
以上。

慶応四年四月　　横井平治太郎

平治太郎は横井小楠の「親類縁者附」[21]に名前のみえる横井牛右衛門の嫡子であり、当時すでにかなりの洋学歴をもっていた。文久三年に江戸に出て、「病院」と「海軍所」とでまず蘭学を学んだと自から語っている。この覚書には全く触れられていないが、その後江戸在住中にすでに英学に転じた模様で、「入社帳」によれば「元治元年春三月」同藩の上野三郎輔（助）外六名と同時に、福澤の塾に入っている。（第三表参照）

慶應義塾における彼の勉強が実際にはどの程度に行なわれたか、彼自身がそれに全く触れていない所からみても、すこぶる疑しいところであるが、いずれにしても半年余りの後には第一次長州征伐がおこり、退塾帰国したことになる。そうして約一年の後、再留学する際には目的地を長崎に選び、同四年までそこでフルヘッキ、柴田大助[22]に学んだと同時に、岡田からも会読の手ほどきをうけたわけである。

岡田はその後、明治二年に彼自身の留学期限がきて帰国し、今度は「長崎表江遊学被　仰付同所江被差越置候遊学諸生之面々江英学致指南候様被　仰付」[23]て再度出崎する。洋学の先進者としての彼の実力を藩庁も評価し、二年前のような「其身修行之傍」の「教導方」ではなく、より積極的に遊学諸生への「指南」を命じたわけである。

慶応四年前後の熊本藩は、長崎を中心にして、実に多くの留学生を送り出している。今試みに同年正月の一ヵ月間のみに限定しても、航海術修行に一一名、医学のために二名、その外単に洋学又は英学修行としたもの各一

名、目的不明一名、さらに一旦は留学を命ぜられながら本人や父親の病気のために断った者が二名、合計一七名の多きを数える。すでに述べた様に「遊学一巻帳」なる冊子が、留学生に関する記録の集成として、諸種の簿冊からの抜き書きとして、この年の四月に新規に編まれたのは、こうした状況を背景としてであった。この藩の洋学志向の高揚ぶりを察するに十分なものがある。

これらの留学生の長崎での目的は「広運館」であり、また「長崎医学校」であったことは言うまでもなく、またその魅力の中心にあったのが「万端之学ニ達」していたオランダ系アメリカ人宣教師フルヘッキ（Verbeck; Guido Herman Fridolin, 1830-1898）であったことは、「資料二」に見る通りである。とすれば明治二年、彼が招かれて東京に出たことは[24]、留学先としての長崎の持つ魅力を何程か減ずるものであったことも想像にかたくない。「我藩庁にては大に時世に鑑みる処有之数多くの留学生を東京又は長崎等に派遣し、洋学修行に従事せしめられ候得とも、弊害続出其成績甚た良好なら[25]」ずと回想されている当時の留学生の状況の一端には、地理的にも留学に便利な長崎から良師を失なったこともあったのではないだろうか。

いずれにしても熊本藩は、これとほぼ同時期に、国許に「洋学所」を設けて自営の洋学教育を始めようとする。これが後に有名な外国人教師ジェンスを招聘して[26]多くの人材を世に送った「熊本洋学校」の母体である。これにともなって、藩からの留学生は一まず「盡く熊本に召還」することになる。これまで長崎や江戸に多数の留学生を送って洋学の導入に努めてきた熊本藩は、今や独自の洋学教育機関を持ちうるまでの成長をとげたのである。岡田は野々村為志と共に、その「誘導方」を命ぜられ[27]、新機関の実質的な中心人物の一人となった。

創立直後の「洋学所」の教授陣の編成にあたって岡田は、宮川又三、富田英三郎、上野三郎助、横井平治太郎を「洋学倡方」に任命するように上申している[28]。これらの人物はいずれも岡田にとっては福澤の門での後輩であ

り、横井の場合は長崎で会読を授けた相手でもあった。上野、宮川も同じ頃長崎にいたから、同様の事情があった可能性は高い。(第三表参照)

この内、宮川と上野は任命を断っているが、その理由は「洋学未熟之上不束ニ而重畳不呑込御座候」と言うものであった。これに対して再度任命を要請した文面に岡田は、「右者洋学所入塾被　仰付置、旧臘已来詰切、諸事倡方同様出精罷有候。両人儀者芸業相進居、一旦者倡方も被　仰付候程之人躰ニ御座候間、宜敷別格之御取扱ヲ以当倡方被　仰付候様」[29]と記している。誕生後間もない「洋学所」を先進も後輩も一致協力して盛り立てている様子がうかがえる。しかしこの三名の学力は事実未だ不十分であったのであろう。彼等はその後明治三年には「洋学為修行東京遊学被　仰付」ている。彼等が再度福澤の塾に帰ったのか、別の機関に勉学の場を求めたのかは未詳である。

熊本藩の洋学導入志向の高揚は、「洋学所」の設立にとどまらなかった。同じ明治二年、藩は直接海外へ留学生を派遣する。すでに見たように林正明が福澤の許での六ヵ年間の修行の後にアメリカ、イギリスに送られたのがそれであり、翌三年には、すでに私費で外国で勉強していた者に対して、出発時点にさかのぼって、藩から費用を支給することがきめられている。

国友次(二)郎は「入社帳」によれば、元治元年春三月に熊本藩から慶應義塾に同時に八人入社した内の一人である。その後いつまで塾で勉強を続けていたか詳かでないが、すでに見た横井平治太郎などと同様に、その後、ある時期からは長崎に留学していた。兄儀平の申立によれば、彼は長崎から「通弁并航海術修行専門として英国軍艦乗組横浜或ハ上海ゟ西洋江も罷越度段奉願候」て、「去ル辰五月遡日同艦乗組同七日長崎表出帆仕、同十二月十八日英国龍動府」に到着した。この留学の費用は、「十ヶ月分大坂におゐて引越渡奉願」「其余ハ自分拵を以取続可申

存意」であったが、「外国ハ別而諸品高直ニ有之候而只今到リ甚以当惑」してしまっていた。藩は彼の窮状に対して、「去ル辰五月英艦乗組之日踏出を以、外々同様遊学料被渡下」ことに決定した。その理由は、「御当藩洋行生林玄助列、纔ニ四人ニ而御大藩ニハ人数少ニ有之」、すなわち大藩であるのに四人の留学生しか出していないとは少なすぎるというところにあった。(30)

ここに林以外の留学生とはだれをさすのか不明であるが、この内二人は幕末の熊本からの留学生として有名な、横井小楠の養子左平太と養弟大平の二人であるかもしれない。彼らの場合も「長崎で語学を勉強しているうちに、どうしても洋行したいと思い定め、小楠門下生たちの資金援助を得て、彼船に乗りこんだ」ものであり、密航同様の私費留学であったが、「慶応三年四月二十七日の手紙でみると、肥後藩政府が二人の遊学費を補助することが決まっている」(31)と言われている。国友と同様のケースは他にも例があったことがわかる。

他方、国内における洋学研究についても、必ずしもすべて新設の「洋学所」で事足りると考えていたわけではない。一方で明治二年七月、長崎にいた四〇名の留学生(32)を「一ト先御国許江被差返候」反面で、他方ではその後も新規に留学生を各地に送り出してもいる。一見矛盾とも思えるこの藩の意図は、国許の洋学校では初歩段階の洋学教育を行ない、より進んだ専門教育の機会は、藩外のしかるべき機関に求めようとしたものと思われる。慶應義塾のみに限ってみても、明治二年八月から四年四月までに一〇名の熊本藩士が入社しており、彼らの多くについてはそれ以前に江戸や長崎への留学経験をもっていたことが確かめられる。

さらに「洋学所」についても、その規模が「甚だ小」であり、洋学倡方達の「宿志を充たすに足らざる」ことが藩の当局者に対してしばしば主張され、この「拡張」が「内諾」され、そのために「是非とも西洋教師雇入の必要なる事」が要求された。当局は「攘夷家の余燼未だ全く消滅せざる」ことを理由に、なかなか実行にふみき

らなかったのであるが、病気のため留学半ばで帰国した、前掲の横井大平の説得により、ついに米田権大参事の賛成が得られ、ここに熊本洋学校が発足することになる。待望の西洋人教師としては、フルヘッキの周旋によって「米国非役士官エル・エル・ヂェーンス氏」を招くことに成功した。

建物も、宅地一万坪を買い上げて「西洋風の寄宿舎一流と教師館一棟」を、長崎から洋館建築請負大工を招いて新築するという大がかりなものであり、ここに一学年三～四〇名の生徒が学ぶことになる。教授内容は「綴字、読方、会話、作文、習字、算術、代数、三角術、開平方、物理、歴史、図画等」であり、その程度は、「今の尋常中学校ほど」であったと伝えられる。(33)

岡田攝蔵のその後の閲歴については、知られるところがはなはだ少ない。ただ彼は滞欧中、フランスで盲人教育の現場を見学し、前掲の「航西小記」の中でそれをレポートしているところから、日本における「『点字』に関する情報をはじめて紹介した」人物と評価されている。岡田のこの側面の事蹟をとりあげた中野善達は、彼のその後の履歴について、次のように述べている。

「岡田はこの後、長崎で熊本藩留学生の引廻役を勤め、明治元年洋学倡方として『熊本洋学所』の教官となったが、同三年七月、洋学所の廃止とともに被免された。この間、明治二年、岡山藩の子弟に英語教授をしたり、明治三年兵部省の依頼で南海測量の英国軍艦及び丁卯艦に士官待遇の通弁として乗艦したりしている。その後の経歴は未詳だが、一説によると海軍省の権秘書官となったが夭折したという。蘭医寺倉秋堤の次女ゆきを妻としたが、彼の死後生れた子が後に新聞記者となった耕平である。耕平の子、貞子は天性の美貌と激しい情熱によって新劇女優として名をなし、杉本良吉とのソ連への恋の逃避行は今だにその艶名とともに語り伝えられている。現在ソヴィェトに在住する岡田嘉子がその人である。(34)」(ママ)

(四)

我々がこれまで用いてきた史料、「学校帳」及び「遊学一巻帳」は、いずれも熊本藩庁の記録であるから、その記事が廃藩置県時点以後には及ばないのは当然である。留学生達のその後の動静は、これらの史料からは求められない。しかしここで問題となるのは、ほぼこれと期を一にして、「入社帳」でみるかぎり、熊本県からの慶應義塾への入学者が急に減少することである。これ以後は、単に留学生の動向が把握できなくなるというのみでなく、この県からの福澤門下生そのものが、相対的にはごく少数になるのである。

廃藩という事態が、各藩からの留学生である塾生達に非常なショックを与えたことは明らかである。彼らは学資の出所と自分達の帰属集団とを一時に喪失したのであるから、途方にくれたことは想像にかたくない。慶應義塾に入社する者の全体数は、文久三年から明治元年まで急速に、同二年からは一層速度を高めて、増加をつづけ明治四年には一つのピークをむかえている。[35] しかし「廃藩置県の結果、士族の子弟の私塾に学ぶ者への公費廃止、明治九年の徴兵令改正による徴集免除の特典の廃止(これはのちに免役の特典が認められた)、明治一〇年の西南戦争後のインフレーションによる士族の困窮などの諸原因が重なって、義塾の学生数がはなはだしく減少」[36]、入塾者の数は、八年に一時的に増えてはいるが、九年以降再び減少して、結局四年のレヴェルに回復するのは、ようやく明治一五年になってからである。[37]

しかし熊本県に特徴的なことは、明治八年の一時的な回復は勿論、一五年以降になっても入社者の増加はみられず、依然として低い水準にとどまり続けたことである。文明開化が叫ばれ、一般には洋学熱が高揚して行く世

相である。世の中が落着いて行くにしたがって、再度就学の機会を求める者が多くなって行ったのは熊本も例外ではなかったと思われる。そうした人々が福澤の塾をさけていったのはなぜであろうか。

すでに述べた様に、筆者はこの原因を、熊本における支配的な思想状況と、福澤の学問との相対的位置関係の中に求められると考えている。そうして幕末以来福澤は、西洋文明の導入による日本社会の近代化を主張してきていたから、原因はむしろ熊本における状況の変化の側に求められるのではなかろうか。幕末以降この藩でしだいに勢力を高めつつあった、洋学を積極的に受容して西洋文明の導入を急ごうとする開明主義思想から、むしろそれに批判的な保守主義への転回が起り、そのため、当時文明開化派の急先鋒とみなされた福澤の塾を敬遠する傾向が強くなったのではないだろうか。(38)

肥後はゆらい「党派国である」(39)と言われている。その争いの源は遠く戦国時代にあり、「やがて政見の争いは延いて郷党の分立となり、変じて主義学意の軋轢となったのである。嘉永安政の頃に至っては、外交問題と結托して、学党は政党の形を以て現はれ、甲論乙駁只に学派の競争にのみ熱中し、殆んど血を流さんとした」(40)。そうした党派争いの中で、「幕末革新勢力の定型的（典カ）ケース」(41)に成長して行ったのが「実学党」である。特に明治二年から三年にかけて行なわれた藩政改革は、「守旧派の大した抵抗もなく『断行』」された、「実学党の勝利」(42)であったと言われ、この学党が藩・県政の主導権をにぎることになる。(43)

実学党の思想、ことに豪農派実学党の理論的中心であった横井小楠のそれは、朱子学から出発してはいるものの、「その固定性が破壊され、思想が流動的機能的に把えられて」おり、西洋思想との接触の結果、一種のプラグマティズムとしての性格を備えていた。彼が考えていた来るべき社会の姿は、「福澤が当面のモデルとした近代資本主義社会」ではなく、その意味では彼の思想は「近代的人間関係を前提としない思想」ではあったが、「近

代社会につらなるものと、封建社会に生きている面との両面が混在」した「過渡的性格を最も明瞭に示した」[44]ものであった。

福澤自身が小楠の「実学」をどのように評価していたかは不明である。[45]しかし理想的な政治形態を「堯舜の治」と表現する小楠を、福澤は「古くさい」と感じたであろうが、小楠の思想の本質は福澤が感じたであろう程には古くさいものではなかったと言われている。[46]

そうであれば、小楠の思想の継承者達には、福澤の「実学」への何程かの親近性があったのはむしろ当然と言えよう。幕末から明治初年にかけての福澤の門へのこの藩からの留学生の背景には、単に当時としては最も組織立った洋学習得の場をここに求めたと言う以上に、肥後実学党と福澤の「実学」との間の思想的親近性があったと考えられないだろうか。この時期の藩政におけるこの学党の勢力の伸長と福澤の門に学ぶ者の数とは比例しているように思われる。

熊本における実学党の政権は、しかしながら、その後永くは続かなかった。明治六年、有名な地方官・安岡良亮が赴任、やがて県令に進むや、「従来熊本の県政を専にした実学党及びその仲間は、殆んど上から下迄一掃せられ」、これにかわって「追々と反対党であった所謂る学校党なども、県庁に採用することになり、神風党なども各社の神官に採用せらるる」[47]ようになった。以後実学党は民権の伸張を主張して、安岡県令に代表される専制政府に抵抗するのであるが、再び県政の中心に座を占めることはなかった。熊本県からの福澤門下生の数の変動は、この地における実学党の勢力の消長を正しく反映したものであると理解することができるのである。

熊本県政における実学党の勢力後退と共に、これまでのように多人数の学生がこの県から入塾することはなくなったが、その後もなお毎年何人かずつの入門者は絶えることなく続いている。小楠の高弟で、没後は実学党の

中心人物の一人となった一敬の長男蘇峰徳富猪一郎は、明治九年八月頃上京するが、その当時の事情を次のように書いている。「父方の親類江口氏は、高廉と云ひ、予の父の弟であった。(中略) 叔父の実子高寛、高達、高邦及び純吉何れも福澤門下で、就中高邦氏は最も福澤翁の愛顧を受け、一時は東京府会議員などをした事もあった。(中略) 右の順序から云へば、予は当然慶應義塾に入るべきであった。併し如何なるわけか、予は熊本に居る時から福澤流は虫が好かなかった。熊本などにても、福澤流は殆ど或る部分を風靡してゐたが、予は何やら気に喰はなかった」[48]。

ここに「福澤流」が殆ど「風靡してゐた」と表現されている熊本の「或る部分」とは、今や非主流派になった実学党の思想的系譜につらなる人々を指しているのではないだろうか。蘇峰本人は若い時から福澤の思想に強い違和感をいだいていたことは、自身がみとめている通りであり、またそれは後年になって、福澤の「痩我慢の説」に対して勝海舟を弁護した時点まで、変らなかったものと思われる。そうして明治一五年に行なわれた蘇峰の福澤訪問のエピソードも有名である[49]。しかし両者の間の違和感ないし反目が、思想的な立場の違いに根拠をもったものであるのか、あるいはむしろ類似した思想であるが故の、表面一層劇しい対立であるのか、従来意見の分れているところである[50]。福澤と徳富、両者の全思想体系にかかわるこの大きなテーマにここで簡単に結論を下すことはできないが、筆者むしろ後者の判断がより正鵠に近いのではないかと考えている。

蘇峰の父一敬は、すでに見たように、小楠没後実学党の中心人物であったが、彼もまた福澤を訪問した記録が残っている。福澤の「知友名簿」明治一三年二月二七日の項には、「江口叔父」と頭註されてその名前がとどめられている。この訪問は、愛弟子の叔父による恩師への単なる儀礼的な挨拶にとどまったと考えることもできるが、一敬が甥の後見人であったわけではないから、何らかの思想的動機をもって行なわれたものと解する方が、

より自然ではあるまいか。

両者の間にどの様な会話がなされ、その結果どのような影響を与えあったかここでは詳かにしえないが、できればこの点をも含めて、廃藩置県以後の肥後実学党と福澤及び慶應義塾との思想的人間的関連については稿を改めて考察したい。

(1) 会田倉吉「紀州と福澤諭吉」　三田史学会「史学」　第四三巻第一・二合併号　一九七〇年五月。

(2) 調査史料集「慶應義塾入社帳」第一～第三及び同第四索引。いずれも慶應義塾塾監局塾史資料室発行。昭和五四年一〇月～同五八年三月。

(3) 前述の共同研究において筆者が分担したのは偶々熊本県であった。

(4) 「慶應義塾紀事」（明治一六年四月）の末尾に附された、文久三年から明治一五年まで二〇年間の統計「慶應義塾入社生徒国分表」によれば、肥後は武蔵・紀伊・薩摩・豊前・越後・肥前・土佐について第八位である（前掲会田論文）。なお、昭和三七年発行の「福澤諭吉全集」第一九巻では、この表ははぶかれている。

(5) 「先生が小幡以下を中津から連れて帰られた元治元年の頃の塾生は（中略）中津人熊本人を主として約二、三十人ぐらゐであったが……」（石河幹明著「福澤諭吉傳」岩波書店　昭和七年　第一巻　四三一頁）と言われており、この時期においては、熊本は塾内の一大勢力であったことがわかる。

(6) 坂井達朗「熊本藩留学生と初期の慶應義塾」上・下。慶應義塾大学通信教育補助教材「三色旗」第四三五及び四三七号、昭和五九年六月及び八月。

(7) 下田一喜編「稿本・肥後文政史」大正一二年三月　四三二～四三三頁。

(8) 水野公寿「林正明の生涯」「熊本史学」第五九号　昭和五八年六月。

なお福澤と林との関係について、「交詢社百年史」（交詢社・昭和五八年一〇月）は次のように述べている。「……当時、福澤の東京府会副議長の進退問題をきっかけとして、過激な自由民権運動にやや冷淡な態度を示す福澤に対し、各種の新聞雑誌が、皮肉なあてこすりをしたり、粗野な言葉を使って攻撃しており、例えば慶応義塾の出身で共同社社長の林正明などは、かれの主宰する雑誌『扶桑新誌』等で福澤を罵倒している最中であるので……。（中略）……右の林正明のような人物は福澤としては交詢社に加入させたくなかったのであるが、事務上の手違いで勧誘状が送られた上に、（中略）林は交詢社の役員である常議員に選ばれており、福澤としては怒りの向け様もなく業をにやし

ていたことと思われる」(三八～三九頁)

(9) 明治一三年一一月一六日付、宛名不明　福澤諭吉書簡。(「福澤諭吉全集」第一七巻・昭和三六年　岩波書店　四一三頁)

(10) 「遊学一巻帳」慶応二年四月一〇日。

(11) 同前　明治二年四月五日。

(12) 緒方富雄編「緒方洪庵適々斎塾姓名録」(昭和四二年　学習教育研究所)には、「安政六稔如月一七日　岡田攝蔵」とある(一一五頁)

(13) 日本歴史学会編「明治維新人名辞典」　柴田剛中　(吉川弘文館　昭和五六年)

(14) 石河幹明　前掲書　四三〇頁。

(15) 野村兼太郎　「岡田攝蔵の書簡と航西小記附録」　慶應義塾経済史学会「歴史と生活」第二号　昭和一三年一月。

(16) 福沢諭吉「福翁自伝」　福沢諭吉全集　第七巻　一〇二頁　昭和四五年四月。

(17) 石河幹明　前掲書　四三〇～四三一頁。

(18) 岡田攝稿「航西小記」序。慶應義塾図書館所蔵本には「岡田攝」とある。なおこれは岡田自身の筆になる原本ではなく、「東京尾佐竹猛氏蔵本を以て影写」された写本である。「昭和五年一月衆議院解散の号外鈴を聞きつつ」と追記されているが、写本の製作者もそれが作られた動機やいきさつも不明である。

(19) 「洋学校設立より開校に至る事情に就いて遠山彌次郎氏の記録」には当時の岡田について「元福澤氏の門人にて長崎に於ける熊本留学生の引廻役たりし岡田攝蔵と申す者」と述べられている(下田・前掲書　五八一頁)

(20) 日本最初の本格的な「お雇い教師」と言われるオランダ人化学者 **Koenraad Wouter Grataam** (1831—1888) のことである。彼は慶応二(一八六六)年二月精得館の教師として来日、同五月から分析窮理所の所長となった。しかし翌年正月には江戸に移っている。(上野益三「お雇い外国人」③自然科学　昭和四三年六月、及び　石橋長英・小川鼎三「お雇い外国人」⑨医学　昭和四四年九月　いずれも鹿島研究所出版会　参照)

(21) 小楠自筆「親類縁者附」(山崎正董「横井小楠　傳記篇」昭和一三年　明治書院　昭和五二年複刻　大和学芸図書出版株式会社　一二五〇頁)

(22) 「…慶応元乙丑年八月に至りこの仮語学所は……新たに済美館と称し……英語はフルベッキ、何礼之助、平井義十郎、横山又之丞、柴田大介……などが教え」(古賀十二郎「長崎洋学史」上　二〇〇頁)と言われる、俗にいう「柴田辞書」の編者柴田昌吉のことである。なおこの点に関しては、本塾文学部の川澄哲夫助教授のご教示をえたことを附記して御礼申し上げる。

(23) 「学校帳」明治二年二月二八日。

(24) Griffis, William Eliot; *Verbeck of Japan*. New York, Chicoago and Toronto, Fleming H. Pevell Company, 1900, pp, 181-2.
(25) 下田一喜　前掲書　五八一頁。
(26) 同前　五八四頁。
(27) 同前　四三三頁。
(28) 「学校帳」明治二年九月～一〇月。
(29) 同前　明治三年正月一二日。
(30) 「遊学一巻帳」明治三年六～七月。
なおこの人物のその後の閲歴は未詳である。福澤全集第一九巻「明治十年以降の知友名簿」には、「海軍大尉　銀座鎖屋町七番　国友一郎」とあり、福澤との交際はその後も続いていたこと、また海軍に身を置いたことは確かであるが、それ以上にはわからない。また鉄砲洲時代の塾に熊本人が比較的多かった（前掲註(5)参照）のは「同藩の留守居役国友某といふ勢力家が先生の許に出入してゐたから、多分此人の勧誘に依ったものであらう」（石河　前掲書　四三〇頁）と言われているが、この「国友某」との何らかの関係も予想される。さらに註(15)の野村論文に紹介された「肥後藩船(航カ)海方国友武右衛門」なる人物（岡田がパリから福澤と連名宛名で手紙を送っている人物）との関係も十分予想されるが、後証にまつ以外にない。
(31) 松浦玲「横井小楠」昭和五一年　朝日新聞社　二五四頁。
(32) 「遊学一巻帳」明治二年八月四日。
(33) 岡田と共に「洋学所」の「洋学倡方」を命ぜられた野々口為志の談話。下田一喜　前掲書　五八四―五八七頁。
(34) 中野善達「わが国特殊教育と福澤及びその門下」「三田評論」第六七〇号　昭和四三年四月。なお引用文中の寺倉秋捉と「資料二」に名前のある寺倉三伯の関係についても後証にまちたい。
(35) 「慶應義塾入社生徒年表」慶應義塾編「図説慶應義塾百年小史」。
(36) 「義塾の維持困難」同前。
(37) 「慶應義塾入社生徒年表」慶應義塾編「図説慶應義塾百年小史」。
(38) 熊本洋学校が創設され、国許での英学教育が充実されたことの影響が大きかったことは言うまでもない。しかしながら、それがわずか数年を出ずして廃止されてしまったことを考えれば、この局面に関するかぎり、洋学校の影響力は限界のあったものといえよう。また「県下唯一の県立中学校であり、学制にしたがった正則中学校として近代教育をほどこす学校」（花立三郎外編「同志社　大江義塾　徳富蘇峰資料集」解説　一九七八年十月　三一書房　八五八頁）であった熊本中学校が、明治九年に創立され、「ヨーロッパ的教育課程によって文明自由の教

育」（同　八五九頁）を開始したことの影響は見逃さるべきでない。しかし当時の熊本には、旧実学党左派の系譜につらなる自由民権派・九州改進党と、旧学校党につらなる保守勢力・紫溟会とが、それぞれに自派の教育機関をもって対立していたこと、またその勢力の帰趨は結局後者にかたむき、民権派の諸学校はいずれも廃校に追い込まれて行くこと、さらにこの勢はついには県立熊本中学校の運命にも及んだこと。（花立外「前掲書」解説　八五七～八六〇頁）これらの事実は、熊本における保守派の勢力の抬頭と開明派の後退が教育の場における露骨な闘争として現象したことを示しており、福澤の塾を敬遠する傾向も同一の思想的基盤から発生したものであると考えることができよう。

(39)　下田一喜　前掲書　四二五頁。

(40)　同前　四二六頁。

(41)　花立三郎「熊本県自由民権運動史ノート」「近代熊本」第五号。

(42)　森下功「実学党藩士派と七月政変」「近代熊本」第二号。

(43)「……父が熊本に召出されたのは、明治三年であったが、三年、四年とかけて父は殆と一年に幾度も官を転じ、漸次その位置が進んで来た。……当時熊本県には県令なるものがなく、父の親友山田武甫氏が参事で林なる人が権参事、吾父が七等出仕で……而して先づ県政は父と山田などの間に専ら執り行はれた」　徳富猪一郎「蘇峰自伝」昭和一〇年　中央公論社　五七頁。

(44)　源了円「維新前後の実学思想と近代文学の発生」「文学」二七巻八号　一九五九年八月　岩波書店。

(45)　福沢諭吉全集　総索引（第二一巻）中の人名索引によれば、横井小楠に言及しているのは全集中唯一ヵ所あるにすぎず、それも暗殺の一事例としてあげられているのみである。

(46)　源了円　前掲論文。

(47)　徳富猪一郎　前掲書　五九頁。

(48)　同前　七二頁。

(49)「但だ当時予の記憶に残ったのは、福澤諭吉翁に面会したる事である。これは予の従兄江口高邦に伴はれて赴いた。江口は福澤翁の愛弟子の一人にて……されば予が彼に伴はれて福澤翁に相見る事を得たのは、当然の事であった。予は平生福澤翁の立言に余り多く感心せず、特に当時翁が官民調和論を唱へて、姑息の妥協論を主張するかの如く考へられて、頗る不満であったから、予は出会ひ頭に、『先生は学者として世に立たれる積り乎。政治家として世に立たれる積り乎。学者ならば千古の真理を探明するが目的であり、政治家ならば当今の務に応ずるが当然であらうが、先生の所論は何づれとも予には判断しかねる』と云ったら、福澤翁はその質問に答へず、『貴君は書物を読む乎』と訊いたから、『勿論読んでゐる』と答へた。翁は、『孰れ貴君が書物を読めば、追って判るであらう』との事で、話はそれで済んだが、帰

途に江口は予に向って、『初見の先生に左様な議論を吹掛くるなどとは、餘りに大胆すぎる』と頻りに予をたしなめた」。（同前　一八七～一八八頁）

(50)「官民調和や強兵富国論を力説していた福沢」に対する「民権家的な階級意識」（色川大吉「蒙農民権への展開――徳富蘇峰の思想形成――」「新編明治精神史」中央公論社　三八四頁）によるとする意見と、「客観的に最も多くの影響を受けた先行思想に向って表面はげしい攻撃を加へたがるものであると云ふ思想家の通有の心理」、「富永仲基が思想史の通則として発見した『加上』の原理」である（家永三郎「福澤精神の歴史的発展」同「日本近代思想史研究」東京大学出版会　二〇八～二〇九頁）とする意見とである。